

奪われたチームメイト

パイオニア2は、移民を目的とした輸送船団。人を運ぶ事を目的としている為に、一年という長い歳月の間も乗船員を飽きさせない設備も施されていた。

その一つが、サッカー場である。

サッカー場と言っても、本格的なサッカーが出来るように芝生まで完備した施設を船内に持ち込んだわけではない。それなりに広いグラウンドと、コーナー四隅にバーチャルボールを投影する柱を取り付けた、簡易サッカー場だ。広さも本物のサッカー場よりは狭く、しかしフットサルグラウンドよりは広いという程度。

本格的にサッカーを楽しむと言うよりは、あくまで「暇つぶしの一環」「船内で軽い運動を

する為の広場」といった目的意識の方が強かった。それ故に広場として活用する際に邪魔となるゴールポストが無く、代わりにボールを乗せると得点としてカウントされる「ゴールポイント」が設置されている。

つまり、名はサッカー場だが、本格的なサッカーをここでプレイする事は出来ない。

元々パイオニア2の乗船員に、プロのサッカー選手がいるわけではない。ある程度ボール遊びが出来ればそれで良かった。

少なくとも、最初の設置理由と母星を飛び立つたばかりの頃は。

一年もあれば、ある程度の施設は遊び尽くしてしまう。しかもパイオニア2は、予定通り一年でその任務を果たし終える事はなく、何時降下できるか判らぬまま、ラグオルの衛星軌道上を浮遊している。

こうなると、パイオニア2の人々は娯楽に飢

え始める。飢えた人々は、現状ある物でどうか娯楽を満喫できないかと試行錯誤を始める。

そして目を付けたのが、簡易サッカー場だった。

遊び程度で始めたボール遊びは、何時しか本格的なルールが話し合わせ、そしていくつものサッカーチームが結成されていくようになっていた。

気が付けば、その場その場で楽しんでいた試合も本格化し始め、ルールの異なったサッカーリーグがパイオニア2内でいくつも作られていた。

もちろん、所詮は草サッカーチーム。実力はプロになど到底及ばない。だがそれでも、いやだからこそなのか、実力が均衡したリーグ戦があちこちで展開され、連日白熱した試合が展開されている。

こうなると、人々の熱気と娯楽心に火がつく。より強いチームを結成しようと練習に熱を入れ

るチームが出たり、またリーグ戦の結果を予想して楽しむ団体が生まれたり、当初考えられていた遊具施設の設置目的を超えた利用が成されていった。

そういった熱意は、時として度を超してしまふ事がある。今回アッシュが巻き込まれた事件も、一人の「度を超えた愚か者^ホ」によって引き起こされていた。

「引き抜き？ たかが草サッカーで？」

事情を聞いたアッシュは、耳にした事実を信じられないとばかりに驚いてみせた。

「ああ、俺もバカバカしいとは思うんだが……」
頭をかきながら、相談している本人……ボガードも苦笑しつつ話を続けた。

「うちの草サッカーチーム『チューチューロケットツ』の主力メンバーが、同リーグで争っている『ぶよぶよフィーバーズ』によって引き抜か

れた。どうやら向こうのチームオーナーが金に物言わせて強引にやつたらしい」

プロの世界ならよくある話だ。母星でも最近、高額年俸の4番打者ばかりをそろえるプロ野球チームが話題になっていた。そこまでして勝ちにこだわるオーナーというのは、確かに実在する。

選手として試合に臨み年俸を得るからこそ、金銭による引き抜きが起きる。有力選手は金の払いが良い方へと流れ、戦力外となった選手は年俸を下げられる。いやらしく感じるかもしれないが、プロだからこそ評価を金額で得ている。

逆に言えば、アッシュが「たかが草サッカーで」と驚くように、アマチュアの世界で選手の引き抜きなどそうある物ではない。個人的な理由ならともかく、少なくとも金銭で引き抜きなんて考えられない。

だが勝ちにこだわる「度を超したオーナー」

が、アマチュアレベルの草サッカーリーグで金銭による選手引き抜きという手段を用いてきたのだ。

「まあ俺達も草サッカーとはいえ熱を入れてリーグ戦をやっている。選手の勧誘や引き抜きに力が入るのは判らなくもないが……」

頭をかきながら、ボガードは顔をしかめ事情をかいつまんで話した。

ボガード達「チュウチュウファイバーズ」は「ソニックリーグ」という草サッカーリーグに所属しているチームで、今回引き抜きを行ってきた「ぶよぶよファイバーズ」の他に、「ソニックヒーローズ」「ジャイアントエッグス」「サンバデアミーゴス」「バーニングレンジャーズ」というチームも所属しており、合わせて6チームでリーグ戦が行われている。

実力は草サッカーらしく、極端に上手くはないが極端に下手でもない、観戦するには少し退

屈かも知れないがプレイしている本人達は非常に白熱する、そんなレベルのチームがそろったリーグだ。

一つのチームを除けば。

「そもそも『ぶよぶよファイバーズ』は、引き抜きなんてしなくても十分に強いチームだったんだが……オーナーが変わって、そのオーナーが強引に選手としてプレイに参加するようになってから、ガタガタと実力が落ちてなあ……」

草サッカーレベルなら、オーナー自ら選手として参加する事自体は珍しくない。そもそも草レベルに「オーナー」が存在する事自体珍しく、普通は自分がプレイしたいからこそチームを結成し、運営資金は各選手から調達してまかな賄うのが基本だ。オーナーがいたとしても、自分がプレイしたいからこそお金を出してまでチームを結成するのだ。それなりに実力も自信もあるものだが……。

「前オーナーは太っ腹な人で……まあ実際に太っ腹な人なんだが……サッカーはしたいが財力に余裕がない人達の為に、オーナーとしてチームを結成したらしい。だから自分はプレイに参加する事もなく、資金援助のみをしていたらしいんだ」

奇特な人も世にはいるものだ。さぞや人望も厚いのだろう。ボガードの話では、『ソニックリーグ』そのものも、リーグ結成に助力しながら、口はいつさい出さなかったらしい。その為、数ある草サッカーリーグの中でも見応えのある試合をするリーグだと注目されていたらしい。

「ところが、オーナーの息子がサッカーをやりたいと突然言い出してな……運営自体はもう軌道に乗り、前オーナーが助力するまでもないと見通した事もあって、息子にオーナー件を譲ったのがそもそも始まりらしい」

オーナーとしてチームを任された腹だけ太い

員する事が多い為だ。

だが同時に、ハンターとしての腕も見られる。増員を要請する事はつまり、依頼した側の技量が目的に達していないと自ら認められた証になるのだから。アナの言う「こっちの仕事に差し支える」とは、この事を指している。

もちろん目的となる探索などの難易度が高ければ、増員やむなしと誰もが評価するだろう。つまり「増員の目的」がなんなのかで、依頼者の技量が評価されるのだ。

「まさか「草サッカーのメンバー募集」を依頼として通すなんて、バカバカしいでしょ？」

両手を腰に当て、深く溜息。アナが心底疲れしていると態度で表した。

ボガードがアッシュに依頼した……いやこの場合お願ねがいいしたとすべきか……その内容とは、草サッカーの試合に助っ人として参加してくれないか、というものであった。確かに、これは

ギルドを正式に通すべき依頼ではない。

「事情は判った。別に俺はギルドを通すとかどうとかこだわらねえし、それはいいけどよ」

それはアッシュにも判る。しかし判らない事が一つある。

「で、なんでアナがいるんだよ」

依頼者であるボガードの横には、ピツタリと寄り添うようにアナが、まるで「私も依頼者です」とばかりに立っている。

「なんでって……」

理由はある。が、説明しにくいのだろうか。アナはアッシュの問いかけに対し顔を真っ赤にするだけでなかなか答えようとしなない。

「お前もメンバーに頼まれたのか？ いやでも女子はメンバーになれないし……」

悩むアッシュに、ボガードが訳を話そうとしたその時であった。

「あつ、そうか。お前子供体型でむ……」

見事に鉄拳がアツシユの顔面にめり込む程ぶち込まれた後で、アナは言った。

「それ以上言っと、殴るわよ」

殴る前に言えというツツコミは、もちろん言いたくても言える状況ではない。ボガードはもはや、乾いた笑いしか立てられないでいる。

ティツシユを鼻に詰めながら、アツシユがボガードから聞いた訳とは、要約すれば「買取問題に関して、先に手伝って貰っていた」との事らしい。

「減ったメンバーを補充するより、まず抗議が先でしょ？」

とは、アナの弁。

「まず前オーナーの元に今回の騒動について説明を求めたのだが……」

アナの言葉を引き継ぎ、ボガードが語るには、説明を求められた「ぷよぷよファイバーズ」の

前オーナーは、報告を苦々しい表情を浮かべたまま聞き、こう発言したそうだ。

「迷惑を掛けて申し訳ないが……一度で良いから、うちの息子とプレイ^遊してやってくれないか」
買取問題の件は、全て前オーナーが責任を持って片づけるという。買取に応じたメンバーにも、前オーナーから話を通すとの事。

ただその見返り……という訳ではないのだが、前オーナーは現オーナー、つまり前オーナーの息子とサッカーの試合をしてやって欲しいと頼まれたらしい。

「ん？なら問題ないだろ。つまり俺はとりあえず、あのピア樽^遊相手にサッカーをすればいいんだな？」

アツシユが言うように、一件この問題は既に片づいたかのように聞こえる。

「いや、それがそう上手くいってないんだよ」
眉間にしわを寄せ、ボガードが説明を続ける。

「前オーナーからは「公平を期す為、引き抜きに絡んだメンバーは試合に参加しない」と言われてね。これで向こうに行ったこちらのメンバーと試合をする事はなくなったが、俺以外メンバーが全くいない状態は変わらないんだ」

それも一時的な事だろ？とアッシュが言葉を挟んだが、ボガードは首を横に振りそれを否定した。

「向こうもこちらも、リーダーがそれぞれ残り四人のメンバーをどれだけそろえられるか、というところから勝負が始まっている」

確かにその通りだ。メンバーの招集はリーダーの人望と力量が大きく影響する。それはハンターズであれ草サッカーであれ変わらない。

「今回の騒動で、うちのチームだけでなく「ソニックリーグ」全体に大きなマイナスイメージが持たれてしまっている。それだけに、この試合で俺……つまり「チューチューロケッツ」が

どれだけのメンバーをそろえ、そして勝つか注目されてしまっている」

さすがに買収問題となれば、別リーグの者達であっても関心を寄せるだろう。その結果として組まれた試合ならば、当然注目も集まる。ここでどのような結果が出せるかで、「チューチューロケッツ」および「ソニックリーグ」の評価が決まる。

その評価によつて、新たな正規メンバーが集められるかが決まるだろうと、ボガードは言う。

「でもさ、汗^{あせ}タルマ^{タルマ}の親父さんの口添えで、抜けたメンバーは戻ってくんじゃねえの？」

楽天的なアッシュの発言に、アナが呆れながら補足した。

「あのねえ、一度金に釣られてチームを抜けた面子が、はいそうですかって簡単に戻ってくると思わない？普通気まずくて戻ってこられ

たと認識し落ち込むアツシユがそこにいた。

「おいおい、それは言い過ぎじゃねえの？まあとりあえず俺がいれば、三人分くらいキツチリブレイしてやつから、気にすんな」

落ち込むアツシユの肩を叩きながら、彼が連れてきた助っ人……バーニイは豪快に笑った。

「いやはや、さすがバーニイ様。頼れる男とはまさにあなたのような方なのでしょう。不肖このティフームも、バーニイ様やアツシユ様に少しでもお役立ち頂けるようがんばりますとも、ええ」

彼なりの気遣いなのか、マアサの伝つてで助っ人にやってきたティフームが場を和ませようと二人を持ち上げている。

バーニイとティフーム、そして更にティフームの伝で同じアンドロイドのライオネルが助っ人に加わり、どうにかメンバーは五人そろった。

余談だが、そもそもの依頼人であるボガード

の伝はというと、そもそも彼の知り合いは草サツカーに携わる者が多く、既に別のチームに所属して助太刀できない者達ばかりであった。そうでなければアツシユなんかに頼みはしない、とアナはボガードに変わって説明していた。

「ところでティフームさんよ、執事のアンタがハンターのライオネルと知り合いだったのは驚いたな。やっぱアンドロイド協会とか、そんなんでもあんのかい？」

落ち込むアツシユをよそに、バーニイが揉み手を続けるティフームに尋ねた。

「知り合いというか偶然なんですがね、ええ。わたくし身体はたいそう丈夫に作られています。運動関係の方はどうにも……それで定期的なメディカルセンターで身体検査を受けているんですよ、ええ」

「で、私もハンター稼業なんかやってる身なん

ネルが良い筋してたしな……三人でどうにかなるか)

ライオネルは現役のハンターだけあってか、良く動き、そしてボールコントロールもそつなくこなした。彼には期待できそうだとバーニイは高く評価している。

「そろそろ試合開始だ。球場に移動しよう」

練習場に現れたボガードが、臨時メンバーに声を掛ける。

「OK。ところでボガード、水風船ミヅカゼフネとこのメンバーはどうなってるんだ？」

試合直前になって、未だ敵チームの情報を聞いていなかった事に気付いたアツシュ。数分後には直接確認できる事だが、一応尋ねてみた。

「金銭での引き抜きがNGになったから……こちら同様集めるのに苦労したらしいとは聞いているが、なんとかそろえてきたようだ」

よく考えてみれば、アツシュが言うところの

水風船ミヅカゼフネに、メンバーを集めるだけの人望があった方が不思議だ。

「……そういや……」

今更ながら、また一つ疑問がわき出てきたアツシュ。

今までの「付き合い」を考えれば、ボガードよりも真まつ先に水風船ミヅカゼフネがアツシュに連絡をよこすのがいつお決まりものパターンであったはず。それが無かったのも不思議な事だ。

「まあいいか。その方が都合良いし」

都合どころの話ではなく、心底誘われなくて良かったと、アツシュは敵チームの面子を見て思う事になる。

球場に入り驚いた事は三つ。

一つは、満員御礼とまで行かないにしても、客席に人が結構な数集まっていた事。草サッカーレベルの試合とはいえ、色々「話題」を集

めていただけに、試合観戦と言うよりは野次馬根性で人が集まっていたようだ。

もう一つ驚いたのは、観客席にチアガールが三人いた事。

「ボガード、がんばってよーっ！」

その内の一人、アナが手にした黄色いポンポンを高々と上げながら跳びはね声援を送っている。スレンダーで健康的な肢体のアナには、白を基調としたチアガールのコスチュームが実によく似合う。

「み、みんながんばってねー」

そして姉とは対照的に、双子の妹クロエは恥ずかしそうに軽くポンポンを振りながら声援を送っていた。

「……」

更に恥ずかしげに、赤面した顔を伏せ、露出した腹部を気にしながらもどうにか片手でポンポンを小刻みに振る少女、マアサがいた。

「おお、なんとなんと。マアサお嬢様まで応援に！このティファー、マアサ様の応援に恥じぬ活躍をいたしますぞ！」

ほろり、と流れてもいない涙を拭いながら、ティファーは感激に打ち震えていた。

そんなティファーをよそに、アッシュは小さく、しかしハッキリと見て取れる程に腕をぐいと引き、よしっ！とガッツポーズをして見せた。

三人のチアガール姿に男心をくすぐられたわけではない。むしろ三人の姿は男として三様に熱い物を感じてはいたが、それ以上にアッシュを興奮させる物があった。

それは驚いた事の三つ目、敵チーム「ぷよぷよフィーバーズ」のメンバーであった。

「ふっふっふっ……アッシュ、悪いけど今日は手加減無しで勝たせて貰うよ。いつもの僕と思ふなよ？」

片足をボールの上に置きながら腕を組み、サ

は私、ノル・リネイル。解説はメデイカルセン
ターにお勤めながら、戦術戦略などにもお詳し
いサリガンさんにお越しいただきました。サリ
ガンさん、よろしくお願ひします。

「よろしくお願ひします」

ここで出場選手の紹介をいたします。チュー
チューロケッツはフォワードにアツシユ選手と
バーニイ選手。ミッドフィールダーにボガード選
手。そしてディフェンダーにはティフォー選手と
ライオネル選手が出場しております。

「中^{ミッドフィールダー} 央のボガード選手が、攻守共にこなせ
る素晴らしい選手ですからね。彼が何処まで活
躍できるかが決め手となるでしょう」

対するぶ……ぶよぶよファイバーズの選手
は、フォワードにホプキンス選手とギゼル選手。
ミッドフィールダーにダッチ選手。ディフェンダ
ーにガロン選手とラクトン選手が配置に付いて
おります。

「こちらも中^{ミッドフィールダー} 央のダッチ選手が鍵となりそ
う……というより、おそらくまともに活躍でき
るのは彼だけでしようね」

はたしてこれは試合になるのか？まもなくキ
ックオフです。

ピーーツ！

さあ試合が始まりました。あつと、ボールを
受けたアツシユ選手、そのまま一直線にゴール
へと向かって行く！

「猪突猛進といいましようか、テクニツク的に
は「突っ込むだけ」ですが、動きの遅いぶよぶ
よファイバーズ相手にはなかなか良い戦法です
ね」

ただの熱血馬鹿にも見えませんが、戦術として
は間違っていない様子……おつとしかし、ここ
でダッチ選手がスライディングタックル！アツ
シユ選手あっさりとボールを奪われました。

「ゴールしか見えていなかったのでしょうね。」

「ダッチ選手が近づくのすら視野に入っていないなかつたようです」

「突っ込んで自爆はアッシュ選手の持ち味ですが、これはいけません。転倒したアッシュ選手を尻目に、ダッチ選手ボールを前へとパス。」

「良いパスですね。これは形勢逆転ですよ」

「正確なパスがホプキンス選手の元に届き……」

「おっと、このパスをボガード選手がカット！インターセプト成功です。」

「敵の動きをよく見ていましたね。見事なパスカットです」

「ぼーっと待つだけのホプキンス選手、ボールを追いかけることなくボガード選手を見送っている。さあここでボガード選手がバーニイ選手にパス。これは綺麗に届きました。」

「相手選手のいないところへ、きちんとバーニイ選手が先回りしていましたね。息のあった良いコンビプレイです」

「バーニイ選手、そのままドリブルでゴールを目指す！」

「鮮やかなドリブルですね」

「このままゴールを決めるか、バーニイ選手。あつと、しかしゴール前にはディフェンダーの二人が。バーニイ選手からボールを二人がかりで奪いに行っている！」

「もたもたしたディフェンダーですが、苦戦していますね。二人の横幅が大きく、なかなか抜け出せないようです」

「まさに肉の壁！ガロン選手とラクトン選手の強欲コンビが一銭、いや一点もやらんと死守しております。」

「取られる事には必死ですね。これは思った以上に強靱な守りですよ」

「まさに強欲がなせる技か。バーニイ選手たまたまバツクパス。アッシュ選手にボールが渡りました。」

「守りの二人はバーニー選手に付いたままです。

これはチャンスですよ」

アッシュ選手、このままゴールを目指して突っ込……おっと、またしてもダッチ選手にボールを奪われた。

「本当にボールとゴールしか見ていませんね、アッシュ選手は」

さあ、ここからぶよぶよフィーバーズの反撃か？おっと、ここでボールが消えて新たなボールがセンターサークルに登場しました。

「この球場ならではの仕掛けですね。登場したのは巨大チューチューボールでしょうか？」

大人の身長程に大きいこのボール、真っ先に触れたのはホプキンス選手です。

「ぼーっと動かずに待っていたのが幸いしたようです。作戦というよりは偶然のようですが」
ホプキンス選手が息を切らせながらゴールを目指しドリブル。そこへライオネル選手がカッ

トに向かっています。

「ボールが大きいだけに、コントロールが難しいですよ」

のたのたとボールをキープするホプキンス選手ですが……。

ピピーッ！

あー、これはいけません。ライオネル選手、思わずホプキンス選手を蹴り上げてしまった！
「どうやら、ボールと間違えたようです。似たような体型ですから仕方ないかと」

優しいサリガンさんから辛口のコメントが飛び出しましたが、同感です。しかしこれは反則。ぶよぶよフィーバーズにフリーキックが与えられます。

「距離的に直接狙うには難しいですね。ボールも大きいので、ここは上手くパスを繋いで得点に結びつきたいところです」

フリーキックはどうやらダッチ選手が行う模

様…… 上手く浮かせていったが、しかしここはボガード選手がカット。そのまま前へ。

「ちよつとギゼル選手が待ちかまえていますね。彼も先ほどから動いていなかったのでは？」

まさに動かざること山の^デごとし。美味しいところだけを貰っていきますよよぶよぶフィーバーズ。

「ギゼル選手、ボールをどうして良いのか戸惑ってますね。もしかしたら彼、サッカーのルールを把握していないのでは？」

どうやらギゼル選手、ただ数会わせで呼ばれたのか？おつとギゼル選手、たまらずボールをそのままバックパス。後ろの二人がボールを取りに前…… おーつと、ここに駆け込む選手がいる！アッシュ選手です！

「彼の真骨頂発揮でしょうか。ボールを見たら突っ込む彼の性格が、良い方向に流れていますよ」

これは予想外の攻撃。鉄壁、いや肉壁の守りを見せたディフェンスの二人がこれに反応できない！

ドドーン！

ゴォー…… ゴールポイントからロケットが発射され、チューチューロケットが先制点を上げました！

「隙をついた攻撃になりましたね。これはチューチューロケットに良い流れが出来そうですよ」

雄叫びを上げ、アッシュ選手無駄な程元気に喜んでおります。

ピッピーツ！

ここで前半終了です。フィールドではチアガールの三人によるハーフタイムショーが行われておりますが…… サリガンさん、ここまでの試合どうご覧になりましたか？

「全てが偶然の産物と言って良いでしょうね。」

そもそもこの草サッカーはボールが途中でセンターサークルに戻るという特殊なルールがありますから、どうやらこのタイミングを上手く掴んだ方に勝機がありそうですね」

現在はチューチューロケットツが一点リードですが、このまま逃げ切るのは難しいでしょう
か？

「双方共に何が起こるか判りませんからね。逃げ切る事よりも攻めのサッカーを展開して欲しいと思います」

さあ、間もなく後半戦キックオフです……おっと、チューチューロケットツは選手のポジションを変えたようです。フォワードのアッシュ選手を後ろに下げ、ライオネル選手を前に持ってきましたね。

「アッシュ選手、スタミナ切れのようですね。前半あれだけ無駄に飛ばしてしまいましたから、当然と言えば当然のようですが」

まさに突っ込み大将自滅の模様。彼を知る人ならば予想していたでしょうが、先取点を上げながらこの姿はあまりにも無様です。

ピーッ！

さあ、後半戦はぶよぶよファイバーズのキックオフから。早くもホプキンス選手がドリブルでゴールを目指しております。おや？ギゼル選手が動きませんがどうしたのでしょうか？

「先ほどの偶然に味をしめ、動かなくても良い
と思っ
ているのでしょ
うね」

確かに、このサッカーではセンターサークルに人を残すのも作戦の一つですが……ああ、予想通りホプキンス選手、あっさりとボガード選手にボールを奪われた！

「そもそも突破力がゼロに等しい選手ですから、当然の結果でしょう」

ボガード選手、速攻でボールを前へ。綺麗にバーニイ選手に渡りました。

「良い流れですよ」

バーニイ選手、そのままドリブルの体制。あとと、ここへ肉壁強欲ブラザーズが二人がかりで突進！バーニイ選手、捕まる前にライオネル選手にパス。綺麗に繋がりました。

「先ほどの失敗を繰り返さないのは、さすがバーニイ選手ですね。またライオネル選手ならばアツシユ選手と違い考えてプレイしてくれるという安心感もあるのでしよう」

裏を返せば、アツシユ選手信用されていなかったのか？さあボールを受け取ったライオネル選手に、早くも肉壁が迫っています。

「切り返しがい早いですね。プレイの精度というよりは、執念が彼らを走らせているようですが」

ライオネル選手、ここはすかさずパス。ディフェンダーもすぐにボールを追いかけます。

「執念だけで追い回しているようですが……これはスタミナの消耗が激しいですよ」

揺れる贅肉飛び散る汗。しかしボールに弄もてあそ

ばれた両選手、駆け回るだけで何も出来ません。

「またオフエンスの二人も上手いですからね。横に広い壁となった二人に邪魔されないよう、高さを使ってうまくすり抜けていますよ」

背が低い上に飛び跳ねるのも容易でない二人にこれはキツイか。さあ、バーニイ選手高々とボールを蹴り上げパス。これをライオネル選手が頭で合わせた！

ゴー………あれ？ゴールポイントからロケットが飛び立ちません。いたいこれは……ああ、これはアクシデントです！ゴールしたかに見えましたが、ゴールポイントの上にあるのはボールではありません、これはライオネル選手の頭です！

「彼、以前身体をバラバラにされてから、すぐに外れる癖が付いてしまっているんです。その為にメディカルセンターに通い続けていたので

すが……これは手痛いハプニングですね」

サリガンさんの勤めるメデイカルセンターの常連だったライオネル選手。ヘディングした勢いで頭が外れ、今慌ててバーニイ選手が拾い上げました。

「簡単に外れる代わりに、簡単に取り付けられるようになっていきますから。戦線離脱は免れられそうです」

しかしこの間にボールはぶよぶよフィーバーズへ。ダッチ選手がそのまま敵陣へ持ち込みます。

「彼もようやく気付いたようですね。フォワードの二人は信用できないと」

頼れるのは己だけか。上手くボガード選手をフェイントで切り抜けるダッチ選手。ここへティフー選手が迫ってきました。

「アッシュ選手はまだスタミナが回復していないようですね。ここはティフー選手に期待する

しかないようですが……」

サッカー経験どころか、運動経験がゼロに近いと自ら語っていたティフー選手ですが、意外に奮闘していますね。

「観客席にチアガールの格好をした彼の雇い主がいますから、良いところを見せたいのでしよう」

チアガールが勝利の女神となるのかティフー選手。両手をばたつかせながらボールを奪おうと必死です。

「ダッチ選手にしてみれば、鬱陶うつとうしい選手ですね。ちよつとこれは抜けるのに苦労しそうですよ」

ダッチ選手、もたついている間にボガード選手が迫ってきました。あつと、ここでボールが消えてセンターサークルに戻りました。

「またギゼル選手が美味しいところを持って行きますね」

出現したボールをギゼル選手、素早くパス。

ボールはホプキンス選手に渡りました……あ
あ、そこへアツシユ選手が猛然とダツシユ！

「スタミナが回復したようですが、また無駄に
勢いづいてますね。これではすぐにへばります
よ」

学習能力がないのか、アツシユ選手。しかし
勢いは凄まじい。猛攻とホプキンス選手にチャ
ージ！

ピピーツ！

勢い余りすぎたかアツシユ選手、ボールでは
なくホプキンス選手を蹴ってしまった！

「勢いもありますが、区別が付かなかったので
しょう。ライオネル選手の時と同じですね」

憎むべきは、ボール体型の身体なのか？ホプ
キンス選手、たまらずアツシユ選手に講義して
おりますが……アツシユ選手逆ギレ！ホプキン
ス選手に詰め寄ります！

「冷静さを欠いてますね……ああ、乱闘になっ
てしまいましたよ」

これでは試合が続くそうにありません。今他
の選手達が二人を引き離してはいますが……あ
あ、やはり二人にレッドカード、退場です。

「お互い、控えの選手がいませんから……これ
で無効試合になってしまいました」

なんとという結末でしょうか。チューチューロ
ケツツ対ぶよぶよファイバーズの試合、両チー
ム試合続行不能となり試合中断、無効となりま
した。

「残念な結果ですが……ある意味、予想通りだ
ったかもしれませぬね」

まさに低レベルな試合でしたが、ここで時間
となりました。実況は私、ノル・リネイル。解
説はサリガンさんでした。サリガンさん、あり
がとうございました。

「ありがとうございます」

パイオニア2サッカーロビーよりお伝え致しました。ごきげんよう、さようなら。

~~~~~

アツシユの暴走により、試合が成立しなかった今回の助っ人依頼。この話題は草サッカーの選手達に大きく広がり、チューチューロケットは回復できない程の痛手を被る事となった。

これはぶよぶよフィーバースも同様で、両チームともこれ以上のチーム継続は不可能と断念。双方合意の元、チーム合併の選択するという所にまで話が進んでしまった。

しかしそうなると、ソニックリーグは5チームになってしまう。これではリーグとして試合を組むのに不都合が生じる。

そこで結局、ソニックリーグは他のリーグと合流し『セガリーグ』という大きな1リーグ制

へ移行。今回の事件は、パイオニア2草サッカーの歴史を大きく変える事件として構成に語り継がれたという。

余談だが、試合をめちやくちやにした当人アツシユは、試合後アナにポッコボコにされたのを追記しておこう。